# 千葉氏と南北朝の内乱

鎌倉時代の終わり頃、千葉氏の本家は下総の千葉氏と九州の千葉氏に分かれましたが、南北朝の内乱が起きると、両者とも有力者を背景として主導権を争うことになりました。つまり、下総千葉氏の胤宗の子貞胤は南朝の新田義貞につき、九州千葉氏の宗胤の子胤貞は、足利尊氏の北朝について戦うことになりました。両者は、下総国の千田庄（千葉県多古町）や千葉城（千葉市）などで戦いましたが、新田義貞が足利尊氏に敗れると貞胤は、足利尊氏に降参しました。このため両者の戦いも終わることになりました。以後、胤貞の家系は九州の所領に土着して新たな発展を求めるようになります。

※足利尊氏‥北朝の武将。室町幕府の最初の将軍。

※新田義貞‥南朝の武将。

◇鎌倉幕府の滅亡◇

元弘3年（1333）後醍醐天皇の挙兵に呼応した新田義貞が上野国で挙兵し、鎌倉を攻めた。敗れた執権北条高時は、一族とともに鎌倉で自害し、鎌倉幕府は滅亡した。

新田義貞像　総持寺蔵

上野国新田庄（群馬県太田市）を本拠地として勢力を振るった豪族。

元弘3年（1333）、上野国で挙兵。武蔵国分倍河原で幕府軍を破り、鎌倉に進攻して幕府を滅亡させた。南北朝の争乱には南朝の武将として活躍。

（写真提供：来毛歴史資料館）

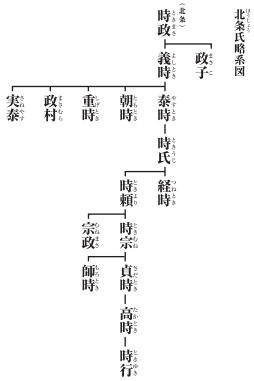
足利尊氏画像　尾道市浄土寺蔵

足利尊氏は、元弘3年（1333）鎌倉幕府の命で出陣したが、丹波国で倒幕に転じ、六波羅探題を滅ぼした。建武3年（1336）7月、光明天皇を奉じて室町幕府を創設。

（写真提供：栃木県立博物館）

北条高時終焉の地　鎌倉東勝寺跡

鎌倉幕府最後の執権。元弘3年（1333）鎌倉幕府が滅亡した際、鎌倉の東勝寺で一族とともに自害する。



# 上杉禅秀の乱・永享の乱と千葉氏

室町時代になると関東には鎌倉府という役所ができました。この長官は、鎌倉公方といい、これを補佐したのが、関東管領でした。この体制は、はじめはうまくいったのですが、四代目の公方であった足利持氏と関東管領であった上杉氏憲（禅秀）の間で争いがおきました（上杉禅秀の乱）。千葉介満胤は氏憲の親戚であったため氏憲側につきましたが、氏憲が討たれると持氏に降伏しました。この乱の後、足利持氏は室町幕府と対立して戦いとなりましたが、幕府に敗れて自殺しました（永享の乱）。千葉介胤直は、最初、持氏側でしたが、持氏が幕府に攻められると幕府側であった上杉氏について持氏を攻めました。

伝足利持氏供養塔　鎌倉市別願寺

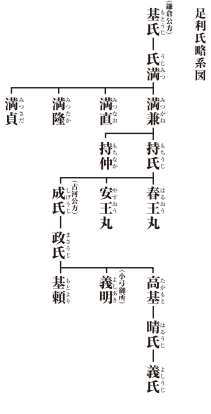
足利義教像　京都市等持院蔵

室町幕府六代将軍。義満の子。当初、出家して義円と称した。将軍義持の死後、還俗して将軍となった。

永安寺跡

足利持氏は、将軍足利義教と対立。永享の乱（1438）で幕府軍に敗れ、鎌倉永安寺で自害。

上杉禅秀館跡　鎌倉市浄明寺



# 結城合戦と古河公方の成立

永享の乱の後、下総国結城城の城主であった結城氏朝は、鎌倉公方足利持氏の三人の遺児をひきとり室町幕府軍と戦いましたが、敗れて自殺しました（結城合戦）。この後、三人の遺児の内、二人は討たれましたが、末の万寿丸は助けられ、成長して鎌倉公方になり、成氏と名乗りました。成氏は、やがて関東管領上杉憲忠と対立し、憲忠を討ちましたが（享徳の乱）、将軍足利義政の派遣した幕府軍に攻められ、下総国の古河に逃れました（古河公方）。この事件の後、関東の豪族達は古河公方側と関東管領上杉側に分かれて戦うようになりました。

足利義政像　京都市等持院蔵

室町幕府八代将軍。兄義勝が没すると将軍を継ぐ。関東公方足利持氏の子万寿王（後の古河公方成氏）を関東に下向させた。また下総で千葉氏宗家が滅亡すると東常縁に関東下向を命じた。

結城氏朝　『結城合戦絵詞』より

関東公方足利持氏が鎌倉永安寺で自害すると、氏朝は、その三人の遺児を迎えて下総国結城城に籠もった。しかし、嘉吉元年（1441）上杉憲実など幕府軍に攻められ、自害した。

古河公方館跡

鎌倉を追われた成氏は、下総国古河に逃れ、ここを本拠地として勢力を振るった。

結城城跡　茨城県結城市

結城氏朝の居城。嘉吉元年（1441）上杉憲実など幕府軍に攻められ、落城した。（写真提供：結城市）

敵足利荘乱入無
是非次第候速有御
勢遣可被急合戦候
恐々謹言
七月十七日
成氏（花押）
岩松左京亮殿

**足利成氏書状**
**古河市立博物館蔵**

足利成氏は、古河公方初代。この書状は、成氏が岩松左京亮に宛てたもの。

# 関東の争乱と千葉氏の分裂

古河公方側と上杉氏側の争いは、千葉氏にも飛び火し、一族や家臣たちは両派に分かれて戦いを始めました。千葉家本家の千葉介胤直は始め古河公方派でしたが、やがて上杉氏につきました。このため古河公方派であった千葉氏重臣原胤房は、胤直の本拠地であった千葉城を攻めました。敗れた胤直は、一族とともに下総国千田庄（千葉県多古町）の多古城や島城に逃れましたが、これらの城も胤直の叔父馬加康胤や原胤房によって攻められ、胤直の一族は滅亡します。胤直一族の滅亡後、千葉氏の本家は、馬加康胤の子孫が継ぎます（馬加系千葉氏）が、胤直の弟 胤賢の子実胤と自胤は、上杉氏等の支持下で武蔵国に移り、これに対抗します（武蔵千葉氏）。

千葉氏略系図

氏胤―満胤
　　満胤―兼胤―胤直―胤将
　　　　（馬加）康胤
　　　　胤宣

原氏略系図

満胤―兼胤―胤直
　　（原）胤高―胤親―胤房

千葉介胤直の墓　多古町東禅寺

千葉介胤直の終焉の地となった東禅寺には大小七基の五輪塔が並ぶ。

# 東常縁と下総千葉氏の本佐倉城移城

千葉氏本家の滅亡後、将軍足利義政に仕えていた千葉氏一族の美濃東氏の東常縁は、美濃国の兵を連れて下総国に向かい、馬加康胤を攻めました。当初、常縁は康胤を討ち、戦いを有利に進めていましたが、その途中、常縁の本拠地であった美濃国郡上郡の領地を美濃守護代によって奪われたため、美濃国に戻り領地を取り戻します。常縁が美濃国の領地に戻った後、下総国内は、本家を継いだ康胤の子孫が統一しますが、康胤の子孫は戦乱によって荒れた千葉城を離れ、新たに印旛沼南岸の本佐倉に城を築き、本拠地を移します。佐倉は、印旛沼の水路で古河とつながっていましたので、この移城は、古河公方との関係を深める意味もありました。

東常縁像　乗性寺蔵

東常縁は、美濃東氏の当主。足利義政の御教書を得て、下総に下向。馬加康胤を討ったが、応仁の乱を契機に美濃に帰郷。歌人。連歌師の飯尾宗祇に古今伝授を行なったことで知られている。

本佐倉城跡
印旛郡酒々井町　佐倉市大佐倉

千葉介胤直の名跡を継いだ馬加系千葉氏は、文明年間本拠地を千葉から佐倉に移した。以来、小田原合戦まで、この城を本拠地とした。

# 千葉氏と小弓の合戦

15世紀になると上総国の豪族、武田氏が下総国に侵攻をはかり、上総国と下総国の境であった村田川付近で千葉氏の家臣であった小弓城主の原氏と戦いを繰り広げます。

当初、千葉氏の支援を受けた原氏が有利でしたが、武田氏が古河公方足利高基の弟義明をまねいて原氏の拠点である小弓城を攻撃しました。原氏は反撃しましたが、小弓城は落城し、義明が入城して小弓公方と名乗りました。小弓公方足利義明は、小弓城を拠点にして房総半島で勢力をふるうようになりましたが、次第に相模国の戦国大名後北条氏や古河公方と対立するようになりました。

足利義明　成田名所図会

足利義明は、足利政氏の子。武田氏に請われて原氏の小弓城を攻略し、小弓公方と称した。第一次国府台合戦に敗れて討死した。

小弓城跡

小弓城跡遠景

（古河公方）足利氏略系図

成氏―政氏―高基―晴氏―義氏
　　　

# 酒井氏と七里法華

上総国土気城主、酒井氏の祖、定隆は、遠江国（今の静岡県）の生まれで、安房国の里見氏などに仕えた後、土気城を拠点に土気（千葉市緑区）から東金（東金市）一帯に勢力をふるいました。土気城主となった定隆は、領内の寺院をことごとく日蓮宗に改宗させたと伝えられています。定隆は、後に土気城を子の定治（土気酒井氏）にゆずり東金城に移りました（東金酒井氏）。以後、両酒井氏は、後北条氏と里見氏の両勢力にはさまれ時々の情勢に揺れ動きますが、後、後北条氏に従うようになり、1590年（天正18年）豊臣秀吉による小田原合戦で後北条氏とともに滅びました。

日泰上人像　本行寺蔵

浜野本行寺の住職。

酒井定隆像　本寿寺蔵

酒井氏の祖。土気城主。

土気城跡　緑区土気町

酒井定隆の本拠地。

本寿寺　緑区土気町

土気城主となった定隆により、本寿寺は建立された。

### ◇ ◇ ◇ 七里法華 ◇ ◇ ◇

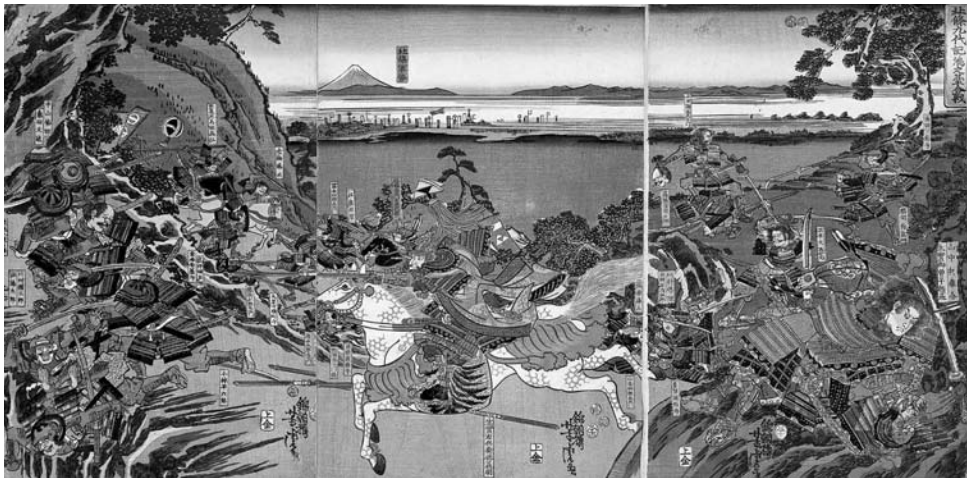
酒井定隆は、品川から船に乗り浜野に向かう途中、嵐にあいましたが、たまたま同船していた浜野本行寺の日泰上人が船のへさきに立ち、法華経を唱えるとたちまち嵐がおさまった。これを見た定隆は、日蓮宗を信じるようになり、「一城の主となったならば、必ず迎えに上がり、領地内をすべて日蓮宗にする」と日泰に約束します。後に土気城主となった定隆は、約束どおり日泰を迎え領内の本寿寺を与え、領地内の寺院をすべて日蓮宗に改宗します。これを七里法華といいます。

# 第一次国府台合戦と千葉氏

小弓公方足利義明は、小弓城入城後、里見氏など房総の武士たちをしたがえて勢力をふるい、甥の古河公方足利晴氏や後北条氏と対立するようになりました。1538年(天文7年)、義明が下総国国府台(市川市)に陣をはると、北条氏綱はこれを攻めて戦いとなりました。戦いは、氏綱が勝利をおさめ、義明、子の義純などが戦死し、小弓公方は滅亡します。里見氏は安房国に逃げました。千葉氏は、この戦いには参加していませんが、家臣の高城氏を後北条氏側に参加させています。

里見氏略系図

義実―成義
　　┬義通―義豊
　　└実堯―義堯―義弘



北条九代記鴻之台合戦図　芳虎画　船橋西図書館蔵

第一次国府台合戦の様子を描いたもの。

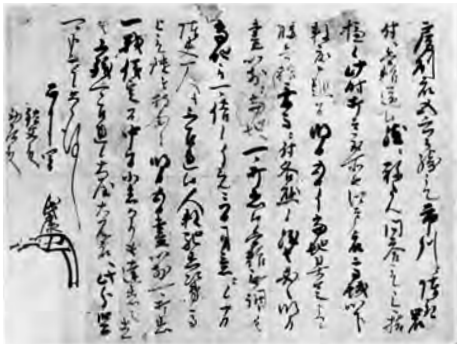
里見義堯像　『北条五代記』　東京国立博物館蔵

義堯は実堯の子。足利義明に従って国府台に出陣するが、敗戦を知ると戦線を離脱し、安房に退却した。

久留里城跡

# 第二次国府台合戦と千葉氏

16世紀になると関東地方は駿河（静岡県）の今川氏、相模（神奈川県）の後北条氏、甲斐（今の山梨県）の武田氏など戦国大名が争うようになりました。この争いに越後国（新潟県）の上杉氏が加わり、複雑な勢力争いがくりかえされていました。上杉氏は、古河公方内の争いを理由に関東に兵を進め、里見氏などに参加を呼びかけました。呼びかけに応じた里見義弘は、国府台に陣を構えましたが、それを知った北条氏康は、国府台の義弘を攻めました。戦いは、氏康が勝利し、敗れた義弘は再び安房国に逃れました。



北条氏康文書　西原文書より

西原文書要約

房州衆（里見勢）が5・6百騎、市川に陣取って岩付（岩槻）に兵糧を送ろうとしているが、「値段で折り合いがついていないので遅れている」という報告が江戸衆（嵩城）よりあった。明日5日当地（小田原）より具足をつけ、腰兵糧が乗馬で出撃するから要員が集まり次第、馬上にて鑓を持ち、明日、昼以前に必ず当地に着陣せよ。

里見義弘像　『北条五代記』　東京国立博物館蔵

義弘は義堯の子。上杉謙信と呼応し、太田資正とともに国府台に出陣するが、北条氏綱に敗れる。

佐貫城　富津市佐貫

里見義弘の居城。

岩付城　埼玉県岩槻市

太田資正の居城。（写真提供：岩槻市）

# 上杉謙信の臼井城攻め

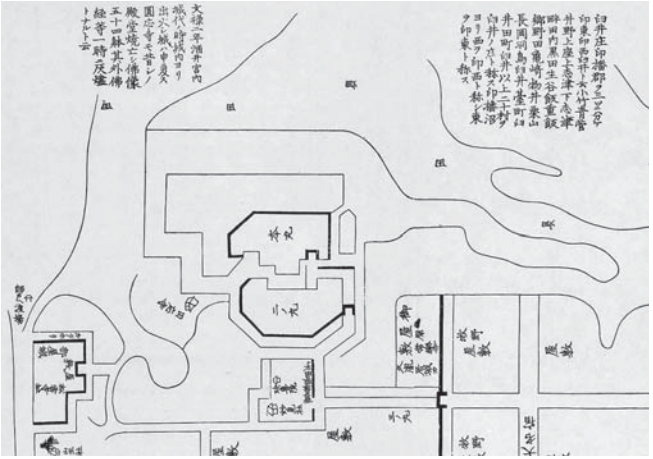
第二次国府台合戦の後、東関東地方に力をひろげた後北条氏に対して1566年（永禄９年）関東管領であった越後国（今の新潟県）の上杉謙信は、反後北条派の安房国の里見氏や足利藤氏の要請で大軍をひきいて下総国の臼井城を攻めました。後北条派であった臼井城主原胤貞は、はじめ苦戦をしましたが、のち千葉氏の当主であった千葉介胤富の助けをかりて謙信の軍をやぶりました。

臼井城跡　佐倉市臼井

臼井城は、弘治３年（1557）臼井景胤の死後、原胤貞が入城した。

上杉謙信像　上杉神社蔵

長尾為景の子。関東管領上杉憲政の要請で、度々関東に出兵し北条氏と戦火を交えた。永禄9年、上杉謙信は、小金・船橋方面から下総に侵入し、臼井城を包囲した。城は堀を一重残すだけになったが、千葉介胤富・原胤貞は反撃に転じ、謙信は、５千余の死傷者を出して敗退した。

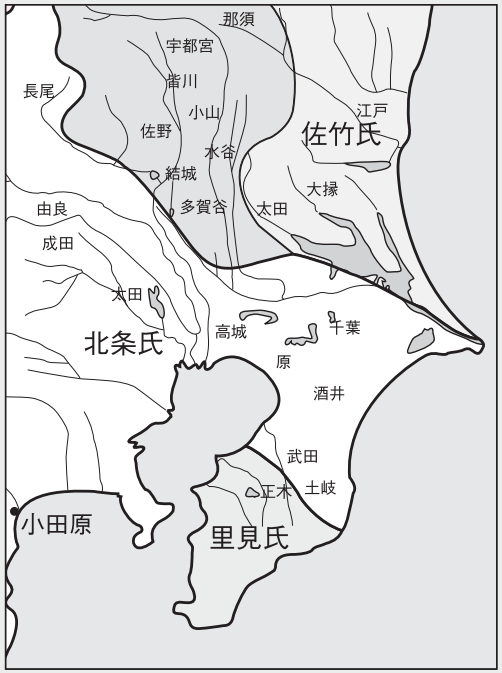


臼井城の図　『成田名所図会』より

臼井城攻の図　『成田名所図会』より

# 後北条氏による関東の覇権の確立

千葉氏と協力していた後北条氏は、1569年（永禄12年）、岩付城（埼玉県）大田氏、5年後の1574年（天正2年）関宿城（千葉県）の簗田氏など関東の有力な豪族をしたがえることに成功しました。房総においては、千葉氏などの諸将は、里見氏に対抗するため後北条氏と接近し、次第にその勢力下におかれるようになります。こうして後北条氏は、16世紀の後半には東関東一帯の支配権を確かなものとしました。



# 小田原合戦と千葉氏の滅亡

1589年（天正17年）、後北条氏は上野国（群馬県）内の所領めぐって豊臣秀吉と争いになりました。翌1590年、秀吉は、16万の兵力をもって後北条氏のたてこもる小田原城を攻めました。北条氏直は、100日あまりろう城しましたが、ついに秀吉に降伏しました。この結果、後北条氏とそれに従っていた千葉氏など東関東の豪族たちも領地を取り上げられて滅亡しました。千葉氏の最後の当主であった千葉介重胤は、1633年（寛永10年）江戸で病死しました。

小田原城内堀跡　神奈川県小田原市

小田原城仕寄陣取図　山口市立文書館蔵

戦国の争乱と千葉氏の滅亡

# 徳川氏有力家臣の配置図

# 妙見信仰

妙見信仰は、北極星や北斗七星を神としたもので、もともと中央アジアの遊牧民に信仰されていたものでした。やがて中国に伝わり中国の伝統的宗教であった道教や仏教とまざりあい日本に伝わりました。この信仰は、平安時代になると日本の仏教のいろいろな宗派で信じられるようになりました。関東地方には、渡来人の移住とともにもたらされ、この地方で成立した武士たちの間にも広まりました。

尊星王立像　園城寺蔵

木造妙見菩薩立像　法輪寺蔵

日本最古の木造妙見像。

園城寺（三井寺）　滋賀県大津市

天台宗寺門派の総本山。寺門派では妙見菩薩を尊星王と称した。

法輪寺　奈良県生駒郡斑鳩町

聖徳太子の創建と伝えられる古刹。

<北極星と北斗七星>

中国では道教で崇拝された。

# 千葉氏と妙見信仰

千葉氏は、その先祖にあたる平良文が上野国染谷川で平国香と戦った際、群馬郡の七星山息災寺に祀られている羊妙見菩薩の加護を受けて勝利を得たとされる言い伝えから妙見を信仰しました。

千葉氏一族は、千葉に移住すると羊妙見を千葉に祀り、北斗山金剛授寺尊光院（今の千葉神社）を建てて妙見の別当寺としました。以来、千葉氏一族は、移住して城を建てたり、館を新築すると妙見をその近くに祀りました。この信仰は、千葉一族だけではなく、一般の民衆にも信仰されました。

※ 別当寺・・・神社を管理するための寺。明治元年の神仏分離令によって廃止されました。

染谷川に示現した妙見　『下総国千葉郷妙見寺大縁起絵巻』より　歓喜寺蔵　非公開

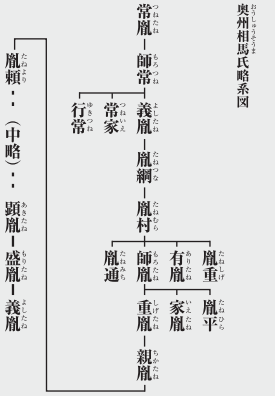
染谷川　群馬県高崎市

七星山息災寺　現、群馬県高崎市の妙見寺

# 奥州相馬氏

奥州相馬氏の祖は、千葉介常胤の次男師常です。師常は、奥州合戦の手柄で陸奥国の中（今の福島県相馬地方）に所領を得ました。当初、師常は、本領のあった下総に住んでいましたが、1322年（元亨2年）師常の孫、重胤の代に奥州に移住しました。以後、家督は、重胤の子孫盛胤へと継承されました。盛胤の子義胤は、1590年（天正18年）豊臣秀吉による小田原城攻めが行われると、この合戦の手柄で秀吉より奥州内に4万8千7百石の領地を認められました。義胤は、関が原の合戦では家康に従わなかったため、一時領地を取り上げられますが、子の利胤は家康から6万石の領地を認められ、1611年（慶長16年）、中村城（福島県相馬市）を築いて移りました。以後、相馬氏は明治維新まで続きました。

奥州相馬氏略系図



中村城跡　相馬市中村

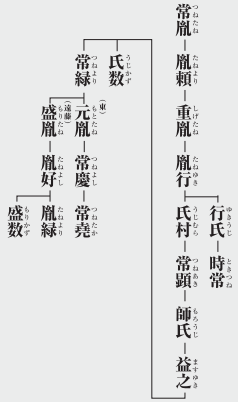
奥州相馬氏は、慶長16年（1611年）、中村城を築き、ここに移った。

# 美濃東氏（みのとうし）

美濃東氏の祖は、千葉介常胤の六男、東胤頼の孫胤行です。東氏は、「承久の乱」の手柄で美濃国郡上郡山田庄（岐阜県郡上市）の領地を得ました。そして、その子の行氏の代に山田庄に移住したとされます。行氏の没後、家督はその子孫の常縁に継承されました。常縁は、1455年（康正元年）、千葉介胤直が一族の馬加康胤と家臣の原胤房に滅亡させられると下総国に下向し、康胤と胤房を攻撃しました。

戦国時代以後の東氏は衰退し、一族の遠藤盛数が1561年（永禄４年）、常縁の孫常慶を滅ぼすと遠藤氏は織田氏、豊臣氏などに仕え、関が原合戦の後、徳川氏に従って郡上八幡藩主となりました。後、近江国三上（滋賀県野洲市）に移され、ここで明治維新を迎えました。

篠脇城跡　岐阜県郡上市

美濃東氏の本拠地。

美濃東氏略系図